

<加古川市文化財調査報告 1>

加古川市西神吉町

# 岸 遺 跡 発 掘 調 査 報 告



1 9 6 1

加古川市教育委員会

# もくじ

## 序 文

### はしがき

I 発堀までの経過	1
II 遺跡の立地と附近の遺跡	2
III 発堀調査の経過	3
IV 出土遺物	4
V 結びに代えて	7
註	9
作業日程大要	10
遺跡遠景(写真)	11
遺物包含層全景 } (1)~(2)	11
繩文土器(写真) (3)~(10)	12
彌生土器(写真) (11)~(12)	16
石器類 遺物出土状態(写真) (13)~(15)	17
発掘調査中のスナップ(写真) (16)~(18)	18
岸遺跡近傍図(図)	19
トレンチ設定図(図)	20
遺物包含層断面図 }	20
繩文土器(図)	21
彌生土器(図)	22
石器(図)	23
あとがき	

## 序 文

加古川市西神吉町岸の採土地から弥生式土器が出ることは早くから知られていたが、この考古学上重要な出土品が不用意に散逸することと、年々採土につれて未調査のままこの遺跡が失なわれていくことを一部識者の中から強く指摘して、調査研究することを要望されていた。本市社会教育委員永江幾久二氏が同地区で鉄製剣を発見されて以来、その重要性に着目され、調査の急を脱かれ、加古川市教育委員会においても、岸遺跡発掘調査委員会をつくりその調査研究に着手するにいたった。

昭和34年8月発掘担当者として関西学院大学教授武藤誠氏、現場指導者として立命館大学大学院是川長氏及び学生喜谷美宣氏外学生諸氏、市内各学校、神戸市熊見学園女子商業高等学校の方々、地元関係者の協力を得て発掘調査にとりかかったが、この事業として十分な予算がなかったため、炎天下に現場で慎重細密な発掘調査に当られた現場担当者の各位には連日並々ならぬご苦労をかけ、不自由な夜食にたえて、この事業を完遂して下さったことは、全く感謝にたえないところである。

遺跡の大部分が採土されていたために、こうしたご努力を重ねていただいたにもかかわらず所期の目的は十分に達しられなかつたと報告されているが、鋤り出された資料によって当地域の從来の疑問点解明に役立ち、岸地区の研究のみならず広く学術研究の資料を提供することができたことは大きな収穫であった。現場指導から今日まで多忙な中で資料の整理報告書の作製に当っていただいた喜谷氏はじめ、関係者各位のご労苦、ご協力によってこの事業を完了することができ、貴重な資料が考古学研究に寄与し、当地出土品の理解に大きな役割を果すことができる考え、ここに改めて深く感謝の意を表します。

昭和36年3月

加古川市教育長 黒田 隆

## はしがき

加古川市西神吉町岸が弥生式土器を出すことは早くから知られておりました。昭和30年には弥生式後期の土器に鉄製櫛が伴出して以来、その重要さに着目して岸遺跡の発掘調査を企図するようになったのでありましたが時すでにおそく、遺跡のほとんどが壊滅したあとであり、この報告書で筆者も述べておられるように、企図した目的は必ずしも達し得たとは申せませんでした。

岸は出土する土器から、せいぜい弥生前期後半以後のものと考えられていたので、從来岸で出土した縄文系の石器類の理解に無理があったのであります、本発掘調査によって発見された縄文晚期の土器によって、それらの理解が容易になったばかりでなく、縄文晚期にすでにこの地方の文化が始まったことを立証し得たことは、この調査の成果といわねばなりません。

更に筆者がこれら縄文晚期の土器と弥生前期後半の土器から、特異な傾向を見い出されて文化浸透の経緯に新しい解釈を附せんとしておられることは、この報告書の意義を大きくするものであります。

発掘調査を指導された関西学院大学武藤誠教授、報告書作成にあたられた喜谷美宣氏をはじめ、現場指導をされた加古川市内の東西両高等学校、農業高等学校、神戸市の熊見学園の先生方や学生諸君、更に地元岸の高谷主一氏、婦人会の諸氏に厚く御礼を申し上げます。

岸遺跡発掘調査委員長 永江幾久二

<加古川市文化財調査報告 1>

加古川市西神吉町

岸遺跡発掘調査報告

I 発掘までの経過

加古川は丹波高原に流源を発し、播磨国を横断して瀬戸内海に注ぐ、東播地方随一の大河である。

この流域においては、日本列島に人類が初めて足跡を印した時代—無土器時代—の遺跡はまだ発見されていないが、次の縄文時代に入ると、わずかではあるが遺跡が知られている。すなわち美嚢郡吉川町豊岡から縄文時代後期の土器が出土している例。<sup>(註1)</sup> 加東郡淹野町高岡から石槍が単独で出土している例などがそれである。しかし、加古川市内においては、まだ縄文時代の遺跡は発見されていなかった。

播磨国における縄文時代の遺跡は、加古川流域ばかりではなく非常に数が少なく、現在までに知られている確実なものわずか十数例にすぎない。このことは遺跡の絶対数の少なさというよりも、遺跡が深く埋もれていて発見し難いなど自然的な条件や、研究者の少なさ、学術調査がほとんど行なわれないなどの理由によるものではなかろうか。<sup>(註2)</sup> 姫路市千代田遺跡の発掘調査で、縄文時代後期の削成繩文土器片が出土したことや、同市鴻崎遺跡の調査でも、土師器包含層の下から縄文後・晚期の土器が出土したこと、また神戸市舞子公園内の円筒柱調査中に、附近から縄文時代中期の土器片が見出されたことなどからもそのことはいえるし、あるいは姫路市内の小山・構などの低地性の遺跡から、縄文晚期の土器の出土が伝えられていることなどからも、その感を一層深くする。この地方の縄文時代の研究は、今後の調査に待つ点が多い。

弥生時代に入ると、流域の各所に遺跡が見い出されるけれども、これまで弥生時代中期以前にさかのぼると考えられる遺跡がなく、この流域における稲作農耕の開始は、弥生時

代も中期に入つて以後のことではなかろうかと考えられていた。

ところが最近、加古川市西神吉町の岸遺跡で、レンガ工場の土取り作業に伴なつて多数の遺物—弥生時代から平安時代まで—が出土し、その中に弥生時代前期の土器が含まれていることが、地元の研究者永江幾久二氏や高砂市の工楽善通氏によって注意された。

従来、播磨における弥生時代前期の遺跡としては、神戸市垂水の吉田遺跡や、姫路市内の小山・橋詰・千代田などの遺跡群の外にほとんど知られていない状態であり、この岸遺跡における弥生時代前期の土器の発見は、加古川流域における最古の農耕遺跡の発見といううにとどまらず、この時代の遺跡分布の空白を埋め、弥生時代前期の畿内と北九州との政治・文化の問題に深くかかわる貴重な発見といわねばならない。

しかし、本遺跡は先に述べた通り土取り工事によって煙滅しつつあり、工事はなお進行しつつあったので、残存する遺跡包含層の調査の必要が痛感されていた。幸にも加古川市教育委員会及び永江幾久二氏ら地元の方々の努力で、関西学院大学武藤誠教授指導のもとに、1959年8月3日より11日まで発掘調査を行なうことができたので、ここにその概略を報告したい。

今回の調査では、後によ述べるように、最初の目的であった弥生時代の遺構の完復や、弥生土器の層位的な把握など十分にはなしえなかつたが、出土遺物の整理に伴なつて、その中に縄文晩期の土器が含まれていることが知られ、新たに縄文文化と弥生文化の関係を知る上に貴重な資料を提供してくれた。この地方の縄文時代の研究がほとんど空白であるだけに重要な意味を持っているというべきであろう。

今回の調査は是川長・喜谷美宣・河野通哉・松岡秀樹・上田哲也・大窪宣之の5名が主として調査に当ると共に、岸弥生遺跡調査会の方々、加古川東高等学校、加古川西高等学校、加古川農業高等学校、神戸女子商業高等学校等の地歴部諸君、芝本一志氏、松本正信氏、村上祐揚氏等多数の方々のご援助ご協力を得た。真夏の炎天下で連日発掘に当ってくださった方々には心からお礼を申し上げたい。また本稿を草するに当つては、特に遺物について京都大学小林行雄先生並びに播磨郷土文化協会今里幾次氏から種々ご教示をえた。調査の計画から実施、更に整理に至るまで私たちをよくご指導くださった永江幾久二氏とともに厚くお礼を申し上げたい。

出土遺物はすべて立命館大学考古学研究会において整理を行なつた。整理後の出土遺物は加古川市立米田公民館において保管している。

## II 遺跡の立地と附近の遺跡

岸遺跡は山陽本線宍粟駅の北方約1キロメートルの地点にあり、現在の行政区では兵庫県加古川市西神吉町大字岸に属し、古道・高岸・井之坂などの小字にまたがっている。

遺跡の立地する台地—神吉台地—は、加古川河口附近に形成された沖積低地—印南野—

を南側に望む標高10メートル前後、水田との比高3・4メートルの台地である。この東南に長く延びた台地上には、岸遺跡の他に大団・中西などの遺跡もあり、一つの集落群を形成していたことが知られる。大団遺跡からは、弥生時代後期の土器が出土しているだけだが、中西遺跡からは弥生時代中・後期の土器とともに打製石庖丁<sup>(せきとう)</sup>・打製及び磨製の石斧・石鎌などが出土している。この内打製石庖丁は稻の穂摘みに用いられた道具であり、稲作農業を証明する遺物として重要である。この種の打製石庖丁は瀬戸内海沿岸地方に広く分布するものであるが、播磨においては打製石庖丁以外、すなわち磨製石庖丁<sup>(せきとう)</sup>の発見例はほとんど皆無に近い。このことはただ原石などの条件のみによって起りうる現象であろうか。今後注意すべき事実であろう。

これらの神吉台地上に立地する諸遺跡は、後に述べるように縄文時代晩期以後継続して住居が営まれた岸遺跡の、おそらく分村というような形で形成されていったものであろう。この背後には、弥生時代前期の段階においては、南側の沖積低地内の自然溝渠の可能な限られた土地のみが耕地として利用されていたのに比して、中期以後の段階では生產技術の発展に伴なって次第に沖積低地全体が、更に岸遺跡の西側から北側へかけての洗川の両岸にまで耕地が拡大されていったであろうことが推測される。このことは岸遺跡の西方魚橋から土器と共に石斧が、また辻からは弥生時代後期の土器が出土しているという事実からも推定されるところである。

またこの時期—弥生時代中～後期一になると、台地の東方、東神吉町升田や池尻からも土器や石器が出土し、相当集落が増加していったことが知られる。

更に加古川東岸の大野山近辺においてもいくつかの遺跡が知られている。大野山では古く磨製石斧の発見が報ぜられているが、聖徳闇の南側斜面や勅使塚附近から弥生時代中期の土器、打製石斧・石鎌などが出土している。また水源地附近からも弥生時代中期後半の土器が出土する。そのほか神野町二塚や、野口町長砂の聖陵山などからも弥生時代の土器や石器類が出土しているし、八幡町上西条、望塚からは銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると、この印南野の周辺には長慶寺山古墳・経塚山古墳・天神山古墳など前期的色彩の強い古墳も出現するし、中期には日岡古墳群の如き播磨最大の古墳群をも形成する。この地方がこうした古代における播磨の政治・文化の一中心地たりえた背景には先に述べたような、縄文時代晩期以後弥生時代全般にわたっての社会の発展のあったことが知られるのである。

### III 発掘調査の経過

今回の調査では、岸部落の北側で、岸から辻部落へ通ずる道路が洗川を渡る手前（南側）の東側で守高岸の西端に当る部分を発掘した。この地点は、台地の北端近くが南側と西側を土取り工事によって削られ、三角状に旧地表を残しており、この南側の崖に認めら

れた東西約26メートルのレンズ状の断面をもつ遺物包含層を中心に調査を進めることになった。(第2図)

調査はまず土取り工事によって出来た崖に平行に、東西約50メートル・巾2メートルのトレンチを設定し、のち場所によっては南側及び北側に拡張した。このトレンチは3枚の水田にまたがっているため、東側からA・B・Cの三地点に分け、更にトレンチの東端から2メートル毎にNo.を付すとともに、崖から2メートル毎にイ・ロ・ハと記号を付して出土遺物を分類することとした。

遺物包含層の最も厚い部分の層位は、表土(耕土)約25センチメートル、その下が黄褐色の粘土質土層で約80センチメートル、そして黒褐色の遺物包含層に続いている。遺物包含層は約60センチメートルで黄色粘土層の地山に達するが、先に記したように東及び西側にいくにしたがって薄くなる。第二層の黄褐色粘土質土層も薄い部分と厚い部分がある。

この遺物包含層の状態は以外に悪く、今回の調査の目的の一つであった遺物の層位的な把握ができず、各時期の遺物が混在していた。しかし概して包含層の最下部に縄文土器が多く、最上部に近い部分に須恵器・土師器が多かった。またこの遺物包含層は自然の凹地に堆積したものらしく何らの遺構も検出できなかった。

永江氏の話によると、かってこの遺物包含層は更に南側に延びていたという。南側は発掘地点よりやや高かったというから、おそらく台地中央部から北に向って傾斜した凹地に遺物包含層は堆積していったものであろう。またその外にも附近にはピット状の遺物包含層が認められ、その内からは比較的完形に近い土器が出土することが多かったという。これらのピットは土取り工事に伴って発見されたため記録にとどめられたものがないが、永江氏の知見に上ったものだけでも十ヶ所を下らないという。このピットの性格については残念ながら十分知りえないが、その内に焼土の層を伴うものも存したといわれているので、あるいは住居址等の生活遺構であったかも知れない。今回の調査でも、主としてC地点において1辺1メートルの方形の小トレンチを数ヶ所設定するとともに、附近一帯にわたってボーリングを行なってピットの検出につとめたが発見しえなかつた。こうした問題は、調査地点の西側に接した部分や、東側の台地上の現在なお遺物包含層を残す部分の、今後の調査で明らかにしていかねばならない問題である。

### Ⅲ 出 土 遺 物

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器など各期の土器片多数と、石斧、石鎌などの石器類若干が出土した。以下時代別に遺物の概略をしることにしたい。

#### A 縄 文 土 器

突帯文を施らすもの、口縁内外に沈線を施すもの、口縁内側を厚くする手法のものなど

に分けられるが、同一型式内での器形の別を示すものであるらしい。その他に口縁部に何ら文様を施さない一群がある。

突帯文系のものには、口縁下の突帯に刻目を付すものと、そうでないものとがあるが、刻目を付すものは、肩部に段をもつ大形の壺形土器であるらしく、段部にも刻目のある突帯を繞らしている（1～4、9）。

突帯に刻目のないものには小形薄手の壺で、口縁及び肩部にそれぞれ突帯をめぐらすもの（5～7）、帯が一周せず曲って口縁に接しているもの（12）、突帯が口縁に平行でないもの（10）、口縁下の突帯の下にもう一条波状の突帯を付したもの（15）、口縁部に大きな圧痕を付したもの（13）、などがある。10～16は鉢形土器であるらしい。これらはいずれも砂粒を多く含む胎土の粗製品で底部は小さな上げ底である（28）。

沈線文系の土器としては、口縁内側に太い沈線を一条めぐらすだけのもの（26・27）、口縁部内側を部厚くし、その内側及び外側に沈線を施すもの（20）、内側にだけ沈線をいれるもの（21）、口縁内側を部厚くするだけのもの（23・24）などがある。20はよく磨かれた精製土器であるが、他は半精製品とでもいべきであろうか。

このほか、無文の土器も若干ある（29～32）。また、口縁部に刻目を施しているもの（17）もある。これらの縄文土器は、いずれも磨滅がはげしく整形手法については十分知りえないが、条痕（19）、削り（18）などの手法が認められる。

この一群の縄文土器が、晩期に属するものである点については、その器形等からみて明らかな所であるが、晩期の内でも新しい時期に位置するのか、あるいは古い時期におかれるべきなのかという点については、若干問題が残るかも知れない。しかし、晩期の新しい時期の精製土器についてはほとんど知られていないので、ここでも一応一時期一晩期の後半の一のものとして取り扱っておきたい。

33に示した土器は、突帯文系の土器であるが、細砂を含む胎土で黄褐色の弥生土器に近い焼成を示す点や、口縁端部の外側及び上部に刻目を施している点などから、晩期の土器中でもより新しい様相を示していると思われる所以一応区別しておいた。大形の土器である。

## B 弥 生 土 器 （前期）

本追跡からは相当量の前期土器が出土しているが、今回の調査では十数個の破片が認められただけである。

前期前半に属するものとしては、肩部に彫刻沈線を伴なった段を有する壺形土器の破片が三片出土している。（1・2・3）。

1は段の下に二重の弧線を施している。2にも1とは逆の弧線がみられる。なお、1及び3の段の上方の沈線が段に対して平行でない点は注意をひく。いずれも砂粒を多く含み

赤褐色を呈する。

前期後半の土器としては、調査前出土の前期土器がすべてこの期に属する。今回の調査では、口縁下に篦描沈線を数条施した壺形土器の破片及び壺形土器の肩部に刻目を有する突帯を付したものなどが出土している(4~8)。壺には刷毛目整形を行なったもの(5)とそうでないものとがあるらしい。また6は篦描沈線の間に刺突文を付している。このほか、大形の土器底部(11・12)、大形の壺形土器の破片なども出土している。

調査前出土遺物はこれと大差はないが、壺についてみると口縁部がよく発達し、突帯に刻目のないもの、突帯間に縦の突帯を付したもの、口縁内側にも突帯を付したもの、頸部から胴部へかけてを篦描沈線で飾ったものなど若干の変化がみられる。壺は「く」字形口縁のはか逆「L」字の口縁も現われてくる。(参1・参2)

なお竹哲による沈文かと思われるものが一例ある(9)が、構描文の初源に關係あるものとして中期に入れるべきものであろうか。

#### C 弥 生 土 器 (中・後期)

中期に属する土器は、前期及び後期の土器に比して量はやや少ないようである。各種の構描文がみられる(13~15)。

後期の土器は大別して二期に分けられるようである。前半は凹線文の発達した時期であり、後半はいわゆる穗積式土器といわれる叩目で整形された土器が主体をなす時期である。

凹線文で施された土器には、頸部に凹線を数条施された壺形土器や、無頸壺、器台などが認められた。

後半の土器には、長頸の壺、叩目のある壺などがあり、本遺跡の出土遺物の大半を占めている。

以上、弥生土器については概略を述べるにとどめたが、いずれ改めて論ずる機会をもちたいと思う。なお、土師器、須恵器も相当量出土したが、小片であるためここでは割愛した。

#### D 石 器

調査中に出土した石器類は非常に少なく、磨製石斧、石礫、叩石、磨石など約10点を数えるのみであった。

磨製石斧。刃部を欠いている。頭部に相当打撃を加えられた痕跡がある。おそらく縄文土器に伴なうものであろう。発掘中に附近の土取り現場から採集された(1)。

石礫。すべてが安山岩製の打製品である(4~7)

叩石。花崗岩製の球形に近い磨製品、両頭部に打痕が認められる(2)。

磨石。花崗岩製の扁平な磨製品である(3)。

このほか、調査前に出土した石器類には、太形鎌刃石斧、石錐、石皿様のもの、石棒らしきもの、砥石などが出土している。

## V 結びに代えて

本遺跡出土の縄文土器が晩期に属するものであることは先に述べた。この一群の土器を一型式として取り扱うには、点数も少なく破片ばかりで器形全体あるいはセット関係を十分知りえないので問題は残るが、一応ここでは仮称岸式土器として播磨における縄文土器編年上の最後の時期に位置づけておきたい。中国地方における黒土B II式土器に平行する時期のものであろう。

以下、縄文土器編年上のこうした時期に位置する土器のもう問題点をいくつか提起し、今後の調査に期待して本稿の結びに代えたい。

本遺跡出土の縄文土器と、次の弥生土器との関係はいかなるものであり、いかなる歴史的な時点に位置づけうるものであろうか。

私たちが播磨の縄文時代晩期の遺跡をみると、質量とともに貧弱ではあるが、まず注意をひくのはそのほとんどが弥生時代前期の土器をも出土する遺跡であるという点である。現在までに知られている縄文時代晩期の遺跡としては、神崎郡香寺町瀬口遺跡・姫路市小山遺跡・同市構遺跡・同市鷺脇遺跡・同市辻井遺跡などをあげることができるが、そのうち小山・構・鷺脇・辻井の各遺跡では弥生時代前期後半の土器が出土している。

播磨における弥生時代前期前半に編年しうる遺跡としては、学界に著名な吉田遺跡のみであり、先にあげた四遺跡や他の前期遺跡はすべて後半のそれである。しかし吉田遺跡が<sup>(註1)</sup>時期のみの遺物を出土する単純遺跡であるのに比して、前期後半の遺跡では中期以後の土器をも出土する場合が多く、永く弥生人の居住地であったことが知られるのである。

本遺跡においては、縄文土器と弥生土器との関係を、層位的に把握しえなかつたが、今回の調査地点以外では縄文土器及び弥生時代前期前半の遺物はまったく発見されていないので、前期前半の弥生土器はおそらく晚期縄文土器中に少量混在していたものと思われる。そして弥生時代前期後半の時期になると多量の遺物が出土し、それ以後長く稻作農耕を主要な生産とする村落がここに営まれていたことが知られる。また、先にもふれた姫路市小山遺跡においては、弥生時代前期後半の土器に小量の縄文時代晩期の土器が混って発見される層があるという。こうした事実から、この地方においては縄文時代晩期の土器と<sup>(註1)</sup>弥生時代前期後半の土器とが時期を接して存在していたのではないか、言いかえれば、この地方では弥生時代前期前半に編年される土器の使用は期間が非常に短く、当地方のある遺跡のみ、あるいは遺跡内のある部分のみに縄文時代晩期の土器と同時に使用され、弥

生文化が地域全体にまで伝播するのは、次の後半へ移ってからではなかろうかと考えられるのである。弥生時代前期後半の土器に、突帯文など前期前半の土器よりむしろ縄文時代晩期の土器に近い手法がしばしば見られることからもその感を一層深くする。<sup>(註15)</sup>

こうした弥生文化の伝播（特に前期の）という問題は、それが人の移動によってなされたのか、技術あるいは文化の面のみが伝播したのかという重要な問題にまで立ち至って考察しなければならないので、ここでは問題を提起するにとどめ、今後の各地での検討に待ちたいと思う。

本遺跡でもう一つ注意をひく事柄は、石器が少ないという事実である。比較的広範囲の調査にもかかわらず石器の総数は十個を数えるのみである。その内、確実に縄文時代に属すると思われるのは、磨製石斧一本という貧弱さである。出土した石鎌その他をすべて縄文時代の遺品としても、その數はあまりに少なすぎる。この狩猟生活に欠くことのできない石器類の少なさは、一体何を物語るものであろうか。この遺跡が海岸・河口に近い位置を占めながら貝塚を形成していないことや、弥生時代の集落と同じ立地を占めていること、タタキ石、スリ石の類を多数出土している点などと考えあわせて、あるいは縄文時代晩期に原始農耕の存在を推定しうるかも知れない。しかし、ここでも当時の生産用具（農耕用の）の発見がないのであくまで持論の域を出ないが、今後同様の性格をもつ遺跡においては注意しなければならない問題である。<sup>(註16)</sup>

本稿においては、第一回発掘調査によって知りえた事実と出土遺物について記すにとどめたため、本遺跡の全貌を十分に把握しえなかつた。しかし、調査前にも多数の遺物が出土しているので、それらを検討することによって、残された幾つかの問題を解決しうるであろう。特に縄文土器と弥生土器との関係、弥生時代中・後期の様相と附近諸遺跡との関係等については、他日稿を改めて論ずる機会を持ちたいと思っている。

## 註

- (1) 神戸新聞社社会部編「祖先のあしあと I」(のじぎく文庫 1958年11月) 及び赤松啓介氏の御教示による。
- (2) 赤松啓介氏の御教示による。
- (3) 和島誠一他座談会「原始時代を語る—播磨を中心として—」(『歴史教育』第6巻第4号 1958年4月)
- (4) 深田芳朗・今里幾次「播磨橋詰遺跡発掘調査略報」(1960年8月)
- (5) 岸遺跡についてこれまでに報告されたものはほとんどない。わずかに神戸新聞社社会部編「祖先のあしあと II」(のじぎく文庫 1959年4月) 及び永江幾久二「加古川市岸弥生遺跡の概略」(『CULTURE』第3号 神戸女子商業高等学校歴史クラブ刊 1960年6月) に概略が述べられている。
- (6) 神戸新聞社社会部編「祖先のあしあと II」(前掲書)
- (7) 今里幾次「播磨西神吉の打製石磨丁」(『考古学』第11巻第4号 1940年4月)。今里幾次「印南郡の弥生式文化」(『郷土志』第2号 1948年7月)。島田清「考古学上よりみた印南郡」9(『郷土志』第10号 1949年11月)。神戸新聞社社会部編「祖先のあしあと II」(前掲書)
- (8) 姫路市小山遺跡、掛保郡小丸山遺跡などで小片が発見されているのみである。今里幾次氏の御教示による。
- (9) 今里幾次「加古川市日岡窓跡の考古学的調査」(播磨郷土文化協会刊 1959年3月)
- (10) このピット中には形の小さなものもあったといわれているので、あるいは大津市南滋賀遺跡や姫路市名古山遺跡で発見されているような蒸氣の加き遺構であったかも知れない。
- (11) 播磨の縄文土器についての報告は以外に少く、畿内の標式遺跡となっている大歳山遺跡や元住吉山遺跡などがありながら、他の遺跡の資料が貧弱なため土器編年についてもほとんど論じられていない。最近では増田重信「播磨」(『青年考古学協議会連絡紙 No. 7』勧向櫻、1957年10月)において播磨の土器編年が、また特戸新聞社社会部編「祖先のあしあと I」(前掲書)において赤松啓介氏の兵庫県下の編年試案がそれぞれ掲げられているが、未だ資料が少いため各期を有機的に編年するまではいたっていない。
- (12) 錦木義昌・木村幹夫「中臣」(『日本考古学講座』第3巻各地域の縄文式土器、1956年2月)。錦木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡—縄文初期の土器を中心として—」(『瀬戸内考古学』第2号 1958年3月)
- (13) 他に最近縄文遺跡として著名な神戸市大歳山遺跡から木葉文の土器片が一片発見されている。
- (14) 調査者今里幾次氏の御教示による。
- (15) 縄文における弥生時代前期前半及び後半の土器が、北九州から東への文化の伝播によって成立したものか、あるいは一度畿内中心地域へ伝播したものが、逆に西へ伝えられて成立したものかという問題については、改めて論ずる予定である。現在までの見通しだけを述べると、前期後半の土器については畿内中心地域から西への文化の伝播によって成立したのではないかと考えている。
- (16) 縄文時代の原始農耕については、古くから多く論じられている所である。縄文時代後・晩期の集落が、それ以前に比して急速に拡大していくこと、低地へ進出することなど集落遺跡の状態や、農耕具と考えられる打製石斧の存在、石籠の存在など生産用具や生活用具の面からなど各方面から追求されつつある。

なお最近では、九州地方の縄文後・晩期の土器に中国大陸の土器の影響がみられると共に石磨丁の存在や初痕の存在が報告されている。(賀川光夫「中國先史土器の影響—九州縄文後晩期の一問題—」『古代学研究』25号 1960年8月)

## ＜作業日程大要＞

- 8月3日（月）晴 午前中、発掘担当者の関学大教授武藤誠氏以下主任是川長氏、喜谷美宣両氏外5名、岸遺跡発掘調査委員長永江幾久二氏、副委員長黒崎基一氏及び黒田教育長等市教委會議室で会合、懇談。午後現地視察ならびに岸部落公会堂において関係者一同集合、今後の打合せを行ない、武藤教授より岸遺跡を「岸弥生式遺跡」と命名。この日出席者28名。
- 8月4日（火）晴 出席者46名。高谷主一氏倉庫より発掘用器具を現地に運搬。現地にて黒崎副会長の挨拶について、是川主任より今後の発掘計画を説明。現場の草刈作業より開始、主として助手班の高校生が当る。是川主任等は測量、トレンチの構張りに当る。
- 8月5日（水）晴 出席者45名、市内3高校の外本日より神戸市熊見学園女子商業高校生約10名参加。発掘現場を3区分して北部よりA B Cの名称を冠し、各高校毎に作業する。A区より縦にトレンチを作る。午後B区より土器破片出土し始め、統いてA区より須恵器及び土師器の破片少量出土したが、腐土がないため本日限りA区の作業を打ち切る。
- 8月6日（木）晴 第6号台風の影響で雲多く、やや涼しくなる。出席者33名。B区を更に4区分して作業を進める。高杯の足、石鐵、こしき、その他相当数の破片出土。
- 8月7日（金）晴 第6号台風の影響漸く強くなる。出席者31名 出土状況前日と大体同様で破片が多い。
- 8月8日（土）雨一時晴 出席者24名。早朝降雨のため午前11時より作業開始、トレンチの外側に排水溝2か所作る。午後降雨のため作業を中止。この間、武藤教授、赤松啓介、和島誠一、榎上重光各氏ら雨の中を現場観察。
- 8月9日（日）雨後晴 昨日天気回復せるも夜来の雨のため作業を中止する。是川主任以下発掘班は宿舎（米田公民館）にて出土品を整理。
- 8月10日（月）晴 出席者35名。午前中B区のトレンチの排水作業を行ない、午後発掘作業にかかる。破片多數出土する。
- 8月11日（火）晴 出席者30名。午前中はB区の発掘作業を続行し出土破片多數を得た。約10日間にわたる炎天下の発掘作業もこれをもって終了。一方測量班も現地の測量を終了した。
- 午後は現場設備を撤収し器具を収納した後、米田公民館にて懇親茶話会を兼ね、作業の経過報告並びに土器の説明会を催した。講師は是川、喜谷両氏。

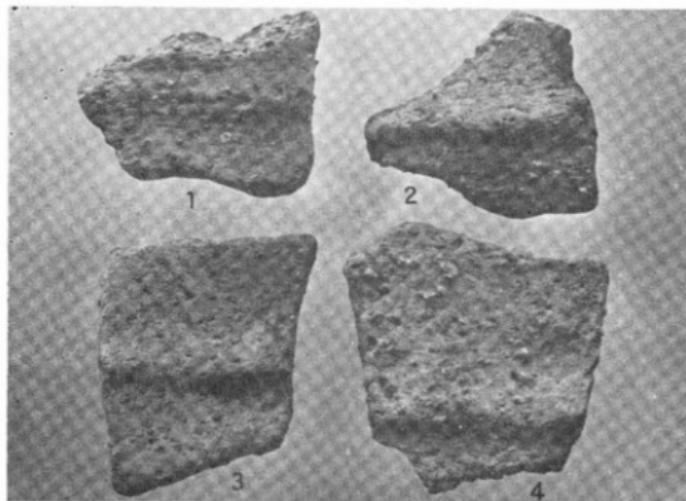
(1) 遺 路 遠 景 (北側から)



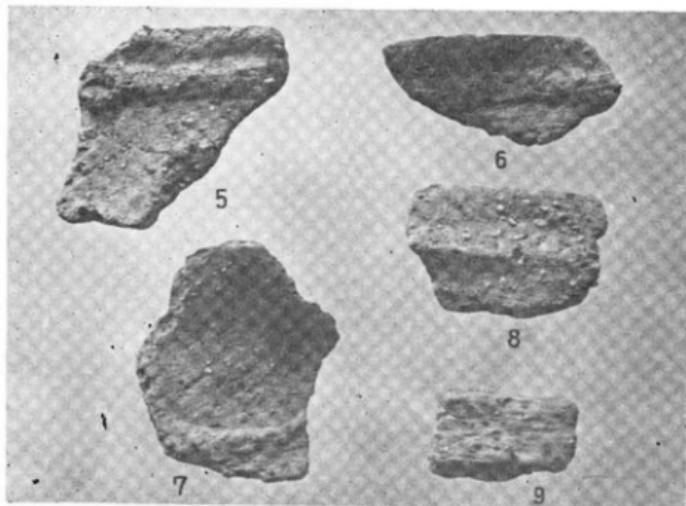
(2) 遺物包含層全景 (南側から)



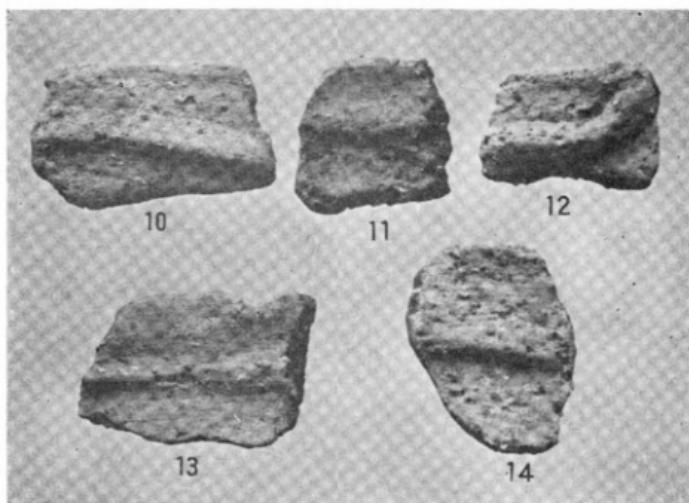
(3) 繩文土器（晚期）



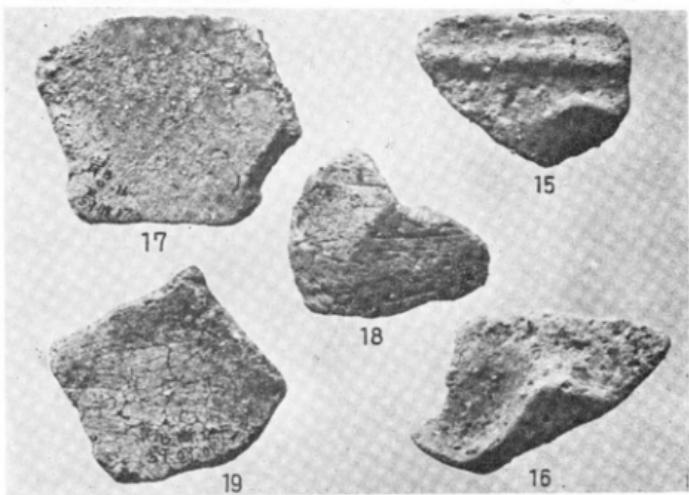
(4) 繩文土器（晚期）



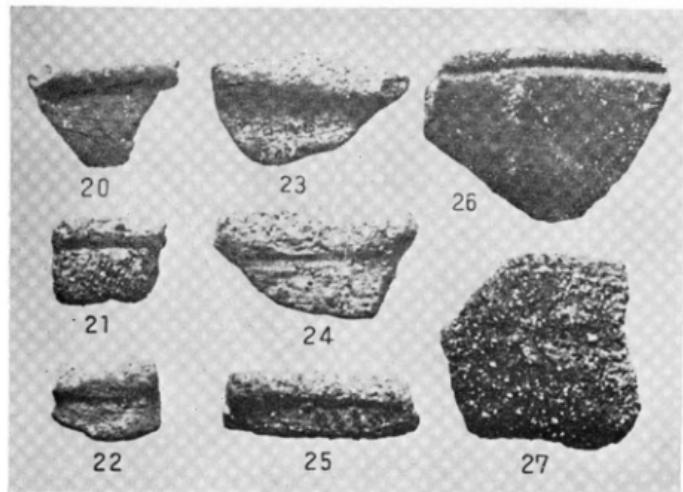
(5) 繩文土器（前期）



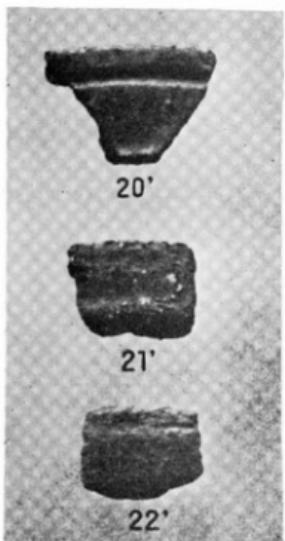
(6) 繩文土器（晚期）



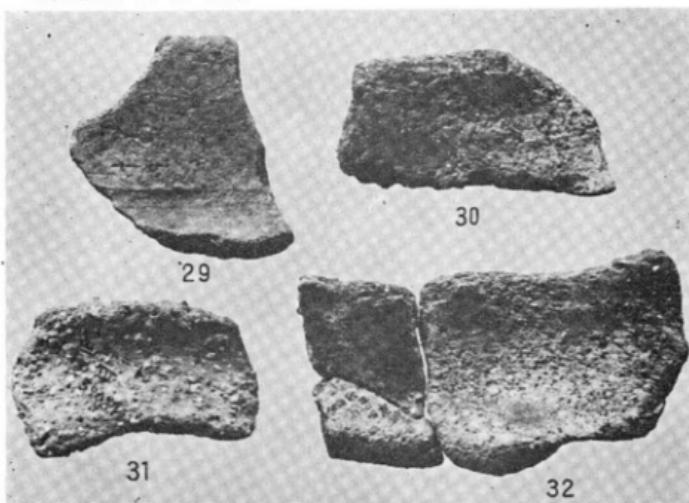
(7) 楩文土器(晚期)



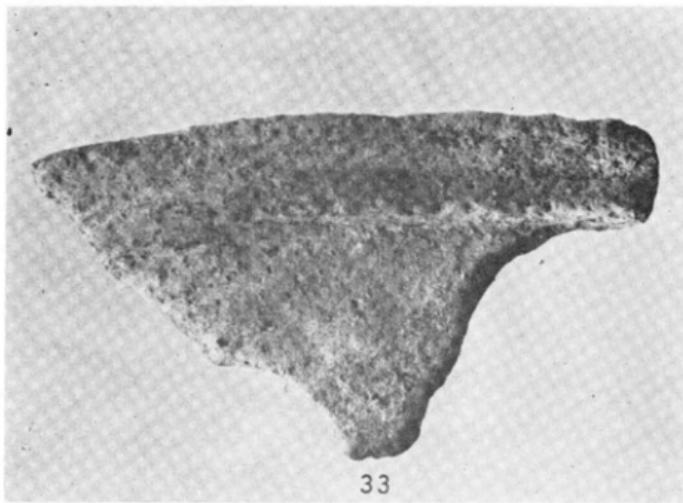
(8) 楩文土器(晚期)



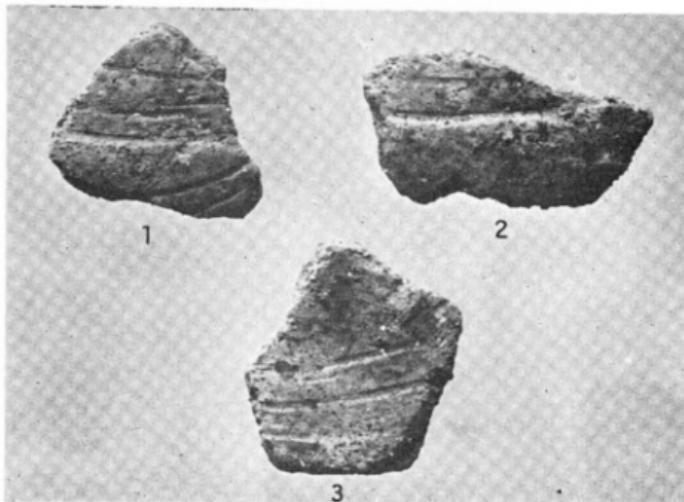
(9) 繩文土器（晚期）



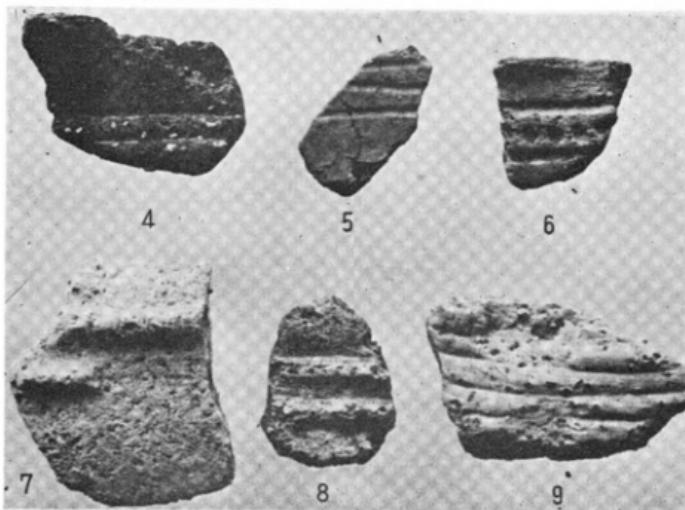
(10) 繩文土器（晚期）



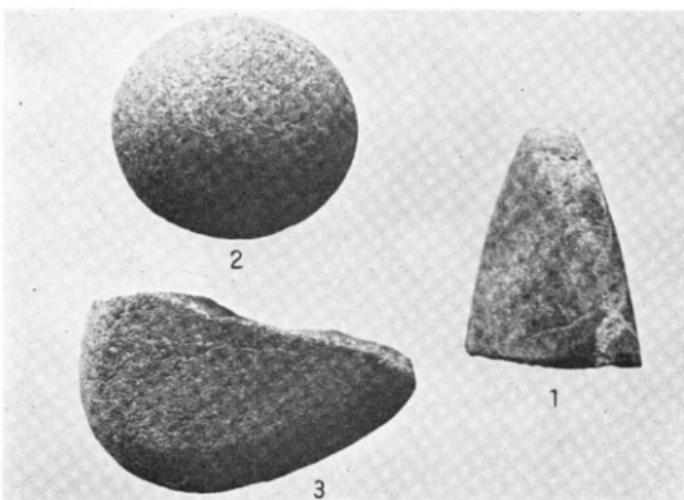
(11) 弥生土器（前期前半）



(12) 弥生土器（前期後半）



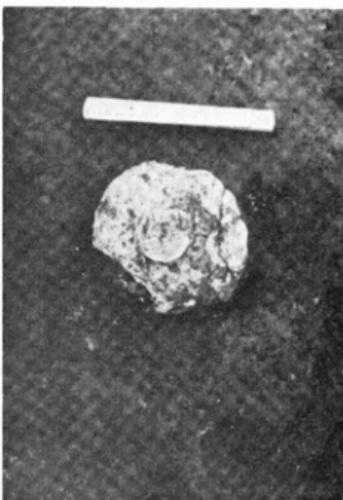
(13) 石 器 類



(14) 遺 物 出 土 状 態



(15) 遺 物 出 土 状 態



(16) 発掘調査中のスナップ



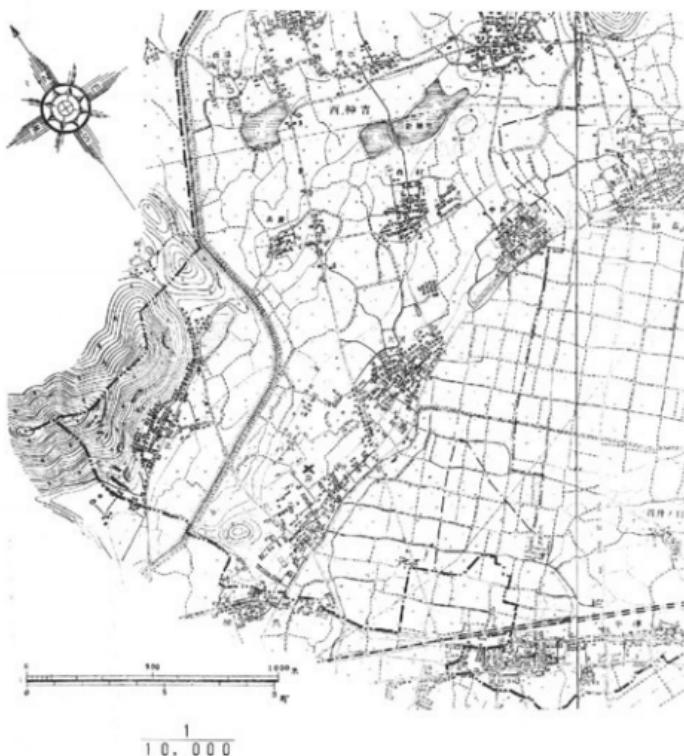
(17) 発掘調査中の  
スナップ→



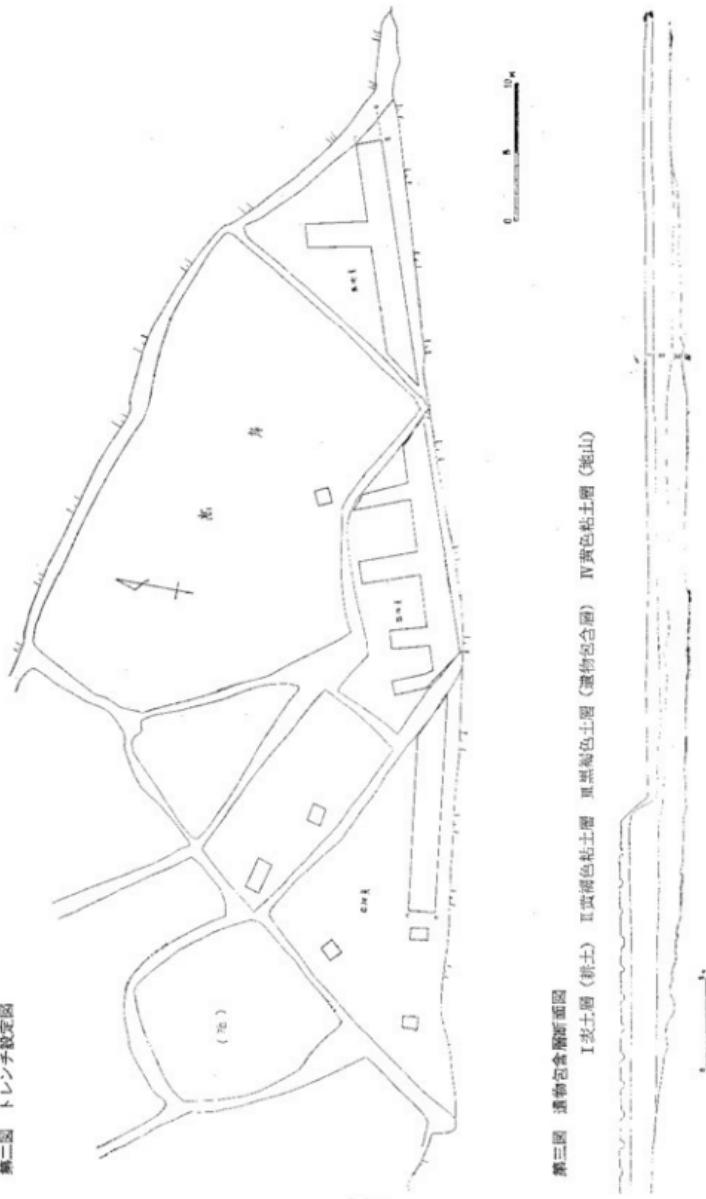
(18) 発掘調査中の  
スナップ→



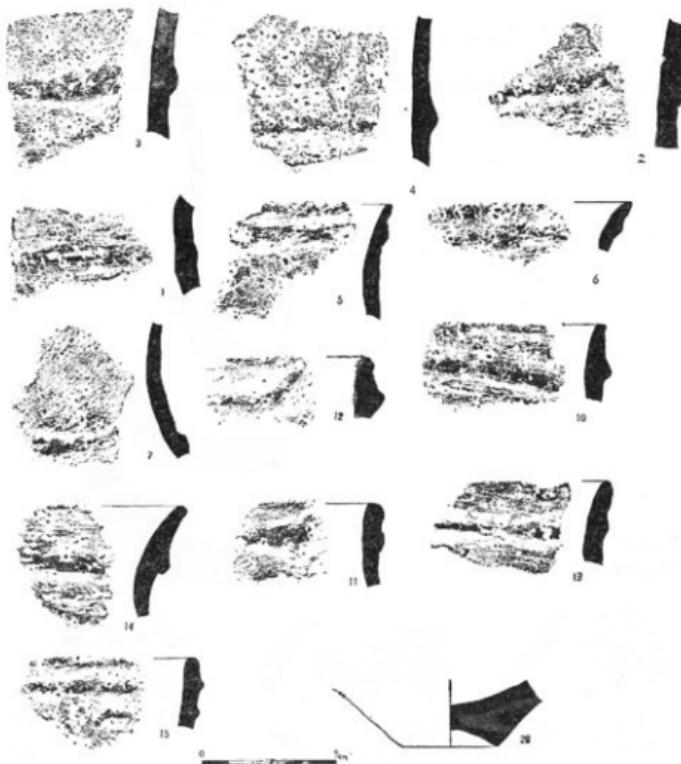
第一図 岸邊踏近傍図



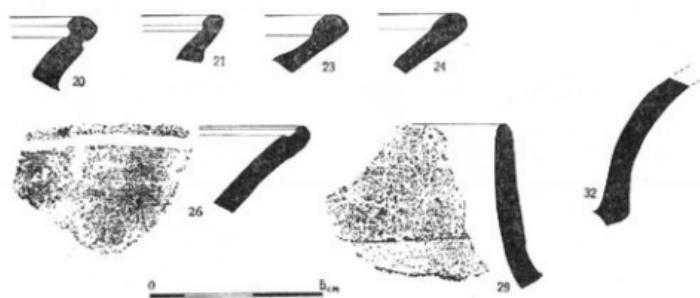
第三圖 トレンチ設定期



第四図 繩文土器（その1）



第五図 繩文土器（その2）



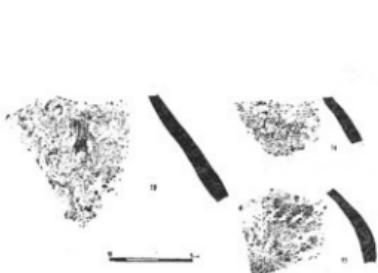
第六図（上） 繩文土器（その3） （下） 弥生土器（その1）



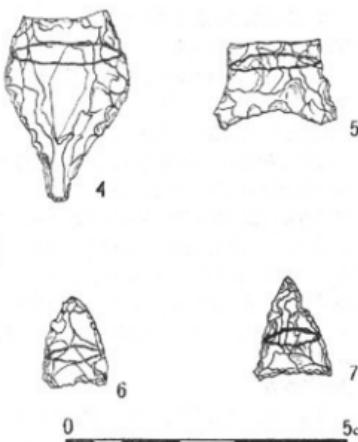
第七図弥生土器（その2）



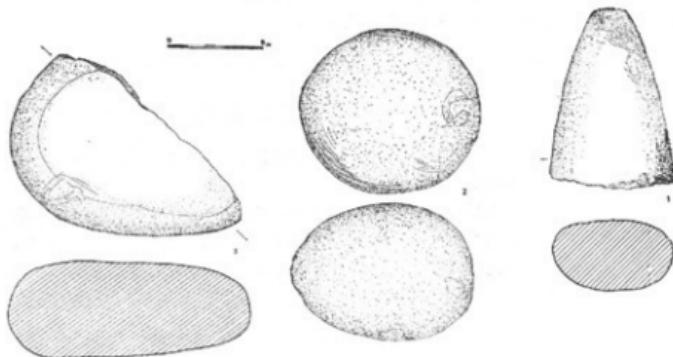
第八図 弥生土器（その3）



第九図 石器（その1）



第十図 石器（その2）



## あとがき

この報告書を刊行するに当り、

岸遺跡発掘調査委員会

委員長 永江幾久二氏、副委員長 黒崎基一氏

発掘担当者

関西学院大学教授 武藤 誠氏

市内東高等学校、西高等学校、農業高等学校、各小中学校、

神戸市熊見学園等の先生、生徒の方々

現場指導と報告書作製に当ってくださった立命館大学学生

喜谷美宣氏、是川 長氏 外学生の方々

市の建設課、米田町 藤原組、加古川町 大村俊治氏、

地元町内会長 高谷主一氏、地元 山本宏一氏、婦人会、

少年団の方々、西神吉町農業協同組合、辻部落会長 下阪

貞三氏

土地所有者

高谷 巍、玉川武雄、鳥井 巍、吉田峯次、西本京次、

森崎はるゑ各氏。

煉瓦会社 播州煉瓦合同株式会社 代表者 高谷克巳氏  
及び北野現場主任

賛助員としての神戸市赤松啓介氏、神戸新聞社壇上重光  
氏等々多數の方々のご労苦、ご協力によりこの事業を完遂  
することができましたことを厚く感謝いたします。

---

## 再刊するにあたって

この報告書は、刊行後すでに10年を過ぎ学究の希望が多く、在庫  
がなくなりました。

しかしながら、貴重な遺跡の調査報告書として、関係各方面から  
の要望が多いので、ここに第2版を刊行することになりました。

諸賢の研究の資料として、参考にしていただければ幸いです。

---

### <加古川市文化財調査報告1> 岸遺跡発掘調査報告

昭和36年3月31日 初版発行

昭和47年3月20日 2版発行

編集 加古川市教育委員会社会教育課

印刷所 加古川市啓文堂印刷所

発行所 加古川市教育委員会

---

